



オール玉川、みんなで一枚岩

協働パターン 町会と企業



概要

主体者名称	玉川町会	町会設立年	1932年
協働先	二子玉川100年懇話会のメンバー企業		
所在地	東京都世田谷区	町会加入世帯数	3,381
		加入率	52.57%
		町会運営メンバー	25人 平均73歳
地域の状況	東急田園都市線、二子玉川駅付近の一般的に「二子玉川」と呼ばれるエリアの核となる玉川1～4丁目全体の町会。1932年に設立され、2022年で設立90周年を迎える。町会には住民のみならず企業も多く加入し、地域を一枚岩で支えている。		
協働の内容	市街地再開発事業で約1,000世帯が新規転入する計画をきっかけに、町会が主体となって地域の課題や活動について話し合う「二子玉川100年懇話会」を2009年に設立。その時々の課題ごとにプロジェクトを立ち上げ、解決を目指してきた。		

協働のきっかけ

町会では、玉川地区にとって大きな変化となる市街地再開発事業の機会にまちづくりを見直すため、ワークショップを行って課題と解決の優先順位の検討を行いました。

さらに、「100年先を見据えたまちづくり」を考えるため、関係団体や学校、PTA、世田谷区、玉川警察署の他、町会に加入している企業、法人などが参加する「二子玉川100年懇話会」を設立しました。

回答者

玉川町会
事務局長
なかむら てるゆき
中村 輝之 さん



玉川町会
防災部長
こうの なおいち
河野 直一 さん



取組内容

これまでに、市街地再開発に伴う転入者に向けた二子玉川の歴史・文化・町会活動を紹介する「二子玉川ものしりマップ初級編」の作成、災害時の共助の要となる「ご近助広場」の整備・周知、震災時に必要な情報を集約した「二子玉川 震災対策マップ」の作成などを行いました。

また、「まちに流れる情報をひとつの器に」一元化するため「まち情報プロジェクト」チームを発足し、地域情報を収集・編集して町内の約20の掲示板に掲載するとともに、フライヤー10,000部を作成し発信する「掲示板リデザインプロジェクト」を展開するほか、防災情報やイベント・グルメ情報、ニュース、コラムなど、玉川地域に関する内容をほぼ毎日発信するウェブサイト「Futakoloco（フタコロコ）」を立ち上げました。

まちづくりのなかで「気がかりに思っていること」を整理・解決するため、2013年7月から5回の勉強会と意見交換会を実施し、二子玉川100年懇話会のメンバーを中心に延べ243人が参加しました。2014年9月にはシンポジウムを開催して二子玉川のこれからの基本方針案を発表し、2015年1月に「二子玉川100年の未来ブック」としてとりまとめました。

協働で工夫したポイント

住民には「玉川のために何かしたい」という意識が強く、町会の主な仕事であるコミュニティ作りの精神が根付いていました。企業とは町会活動に加わってもらえる関係を構築してきました。「玉川を良くする」という目的を共有し、活動の魅力を高めて気持ち良く参加してもらえるように意識しており、協力的な企業が多いことを嬉しく思っています。

行政には、お願いをするというスタンスではなく「こんな分野で社会実験をしましょう」という形でプロジェクトを提案しています。

ふりかえり（評価）

(1) 事業の実施結果

二子玉川ものしりマップの作成は製作チームのメンバーがまちを改めて知る機会にもなり、最終的には町会加入を問わず全戸に配布することになりました。

「まち情報プロジェクト」チームの取り組みは、二子玉川100年懇話会の参加団体、世田谷区の担当者のみならず、二子玉川の住民やエリアに関わる人々をつなげるきっかけにもなっています。

(2) 協働の一連の取組結果

事業準備段階	プログラム遂行	事業終了後
◎	◎	◎

2ヶ月に一度、会合し、地域の情報を共有しています。現在は新たなプロジェクトを追いかけるのではなく、行なってきたプロジェクトの定着を意識しており、玉川町会がさらに一枚岩となれるよう活動を進めています。

今後の展開

地域のために何ができるかを考えるにあたって、単独ではできなくてもオール玉川で取り組むことでこれまでと異なるまちづくりができると感じています。これまで、玉川町会は自分たちでできることは自分たちですという意識が強く、二子玉川100年懇話会もその発想が出発点でした。しかし町会の高齢化は避けられず、次世代の育成が課題となっています。玉川町会の強みは法人会員がいることであり、今後、その社員が事務局として参画することを期待しています。

活動者・参加者の声

防災も防犯も、普段からのコミュニケーションがあるだけでも良いと思うのです。たとえば、夕暮れ時、高齢者が自然に集まって、ちょっとワインでも飲むかなどと言いながら、たわいない話をする場所がある。ちょっとだけ着飾って、人生を語ったりする。そんな風にお互いを知り合う場所があれば良いのかもしれない。

（「二子玉川100年の未来ブック」からの引用）